



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 7
発行

平成8年3月31日
日本山岳会熊本支部
熊本市二本木3丁目3-8
(田上敏行・気付)

編集
印刷

電話 (096) 324-1200
本田誠也・広吉 功
有みうら企画
熊本市清水町山室50-80

・支部長随想……………	1	・会員近況……………	19
・会員随想……………	2	・後記……………	20
・会務報告……………	17	・図書資料目録……………	21

随想 1995年

支部長 本田誠也

平成7年は、熊本支部にとって二つの喜ばしいニュースがありました。その一つは、日本山岳会創立90周年記念事業としてのマカルー登山隊に、支部会員の馬場博行さんが隊員として参加したことです。これは中国側から、未踏の長大な東稜より登頂を目指すもので、極めて難易度の高い意欲的な計画でありました。(マカルー東稜は予想以上に難しいルートであった。特に連日の雪崩、ルート崩壊の恐怖は登山隊員はもとより、私にとってもトランシーバーの切迫した交信を聞きながら、「進むべきか」「退くべきか」、その選択に脅える毎日であった)と、重広隊長は登山隊報告に書いていますが、最年長の馬場さんは豊富なヒマラヤ経験を活かして、最も苦勞の多いルート工作や荷上げの中核となり、登山隊を成功に導きました。そして二つ目は、前支部長の奥野正亥さんが名誉会員に推薦されたことです。1940年に入会し、会員番号1818番の奥野さんは既に永年会員になっていますが、戦前の北朝鮮の山々での数々のパイオニアワークが、高く評価されたものと思います。10月14日、東京の新高輪プリンスホテルで開催された記念式典の際、新名誉会員11名が発表されました。当日は、そのうち8名の新名誉会員が出席されて、会場の全員から温かい祝

福を受けました。出席出来なかった奥野さんの代わりに、私が多くの方々からお祝いの言葉をいただき、随分鼻が高い思いをしたものです。昨秋、奥野さんから写真集「北朝鮮の山」を頂きました。既に物故された朝鮮山岳界の先駆者、飯山達雄氏の編になるものですが、この中で核心となる冠帽連山、胞胎山、金剛山の岩場などの記録は、すべて奥野さんが執筆されています。モノクロの写真集はたいへん懐かしいものですが、意外に新鮮で迫力があるのに驚きました。また極寒の初縦走記録や、鮮烈な岩壁初登攀の記録などが、奥野さんのお人柄を偲ばせるような、気負いのない穏やかな筆致で書かれています。私が初めて奥野さんにお会いしたのは、いまから30年も前のことですが、身長もあり堂々たる偉丈夫という印象でした。しかし謙虚で口数の少ない方でしたので、朝鮮の山のことなどは1987年の「熊本支部設立30周年記念誌」に、「愛しき山々」と題して書かれるまでは、あまり知りませんでした。「北朝鮮の山」は、今84才の奥野さんが、まだ20代後半頃の言わば「青春の山」であったのでしょうか。まことに相応しい方が名誉会員になられたと、心から喜んでいるところです。

無 題

…私が近ごろ一番感じたこと…

名誉会員となって

支部顧問 奥野正亥

昨年の10月、日本山岳会の事務局から電話があった。突然のことで驚いたが、私が名誉会員に推薦されるということで、2度びっくりであった。お受けして電話を切ったものの、何とも落ち着かない気持ちで日々を過ごした。少し経ってから、在朝鮮時代の山行が評価されたのではと思い、遙かに過ぎ去った歳月と、心に深く残っている山々を想起したことであった。

- 1) 1936年 秋(25才) 金剛山集仙峰の1230m峰を初登攀。同行は川村光三氏であった。
- 2) 1936年 冬(25才) 京城帝大予科山岳部の冠帽峰登山隊に参加。前人未踏の民幕谷より主峰往復。極地法登山の面白さを味わう。
- 3) 1939年 夏(28才) 金剛山集仙峰中央稜の第2峰(C2)初登攀。同行は遠藤孝一氏。
- 4) 1939年8月～10月 金剛山協会の事業として集仙峰山小屋の建設に従事(専任)
- 5) 1939年 冬(28才) 渡正山より冠帽主峰へ縦走、天上水を下って延社に出る。全コース積雪期の初縦走である。同行は渡部泰造氏と伊藤玉喜氏。
- 6) 1940年 冬(29才) 北胞胎山より南胞胎山(主峰)將軍峰へ初縦走。南溪水を下って胞胎里へ出る。同行は渡部泰造氏。

以上の登高記録は、「北朝鮮の山」飯山達雄・編(発行・図書刊行会)に写真と共に載せられている。これらの記憶は、私の生涯の宝物である。この山行を思い出す度に、計画し、調査し、実行したのは自分だが、半分は、山から登らせてもらったのだと思うようになった。大自然の中では、人間の力などは微々たるものだと思うと共に、山の仲間の温かい友情に包まれて、共に過ごしたことを心から感謝している。

和仁古昇

この1年を顧みて、もっとも印象に残ったことをお話ししましょう。昨年秋の9月17日に、熊本市の青年会館大ホールで、“脊梁の原生林を守る会”が主催して講演会が開催されました。「水源の森を守ろう」というテーマで、幾人かの講師が意見を発表されたのですが、その中で、宮城県の気仙沼から来られた「牡蠣の森を慕う会」の会長の、畠山重篤さんが「森は海の恋人」という題で話をされました。要約すれば、森林の腐葉土と土中の鉄によって生成されるフルボ酸鉄が、川からどのくらい供給されるかで、海産物の量が計算できるというものです。そのことから、水源を確保する広葉樹林は漁業にとっても重要なものであると訴えられたのです。畠山さんは一見、作家か学校の先生のような風貌で、背の高い方でした。お話では、長らく気仙沼の海岸で牡蠣の養殖をしているが、以前はコロコロと太った大粒の牡蠣がよく採れていたのに、最近はだんだん量も少なく質も小粒となり、漁場も汚染された感じになってきた。どうしたものかと心配していたが、そんなある日ふと海岸から山の方を見ると…湾に流れ込む川の上流に太田山というのがあるのですが…その山が以前と違って大分伐採されて荒廃した感じなので、若しや山の荒廃が海の汚染をもたらしたのではと考えたのです。それで自分なりに研究もし、学者の方の意見も聞いてその因果関係を確認、6～7年前から水源地の植林をはじめたとのことです。山の腐葉土の下で形成されるフルボ酸は、細流となって下流へ流れる間に土中の鉄分と化合して、フルボ酸鉄となり貴重な栄養源として海に流れ込む。これが多くのプランクトンを養うのです。そのプランクトンを追って小魚が集まり、更に小魚を捕食する大きな魚がという具合に、段々と海産物の量も増えてきます。海水中の

栄養分の、何と80%は河川から供給されるということが判ったそうです。今まで考えたこともないことで、この話を聞いて私もたいへん驚きました。昔から漁師の間では「大雨のあとは魚がよく採れる」という諺があるそうで、これで納得しました。このことから、たくさん腐葉土を作り、保水量も抜群に多いブナの木を植えなければならないと、つくづく考えているこの頃です。

トルコの旅から

門 脇 愛 子

平成7年は、日本人の安全神話が崩壊した年でした。人為的なものもありましたが、自然の脅威の大きさを改めて思い知らされたものでした。大自然の大きな力に比するとき、科学が進んだとは言っても、人間の力はまだまだ小さいものです。万物の創造主「神」のなさることは、全く人智を超えるものであることを痛感しました。この秋に「美術館友の会」のトルコ、ギリシャ・ツアーに参加しましたが、つくづくこのことを感じさせられました。トルコは私にとって未知の国なので、大きな興味と期待がありました。日本と同じ紅葉の季節でしたが、ポプラの黄葉が黄金色に輝いて私を魅了しました。野菜類が豊富で食べ物も美味しく、政情も安定しているようでたいへん快適な旅でした。ツアーの目的である遺跡や考古学博物館巡りも、今までになくたいへん興味深いものでした。殊に Cappadocia の自然は、私にとって全く想像を絶するものでした。話には聞いていましたが、こればかりは「百聞は一見に如かず」で、不思議な異次元の世界でした。によきによきと土柱が立ち並ぶこの珍しい地形は、数百万年前エルジェス山(3916m)とハサン山(3253m)の大噴火によるものと云われています。地表を覆った火山灰が次第に冷却し凝固し、それが長い年月の間に、風水雨によって浸食が繰り返されて形成されたのです。柔らかい表土が

流され、固い岩の部分が残ってできた帽子を被ったような岩、“妖精の煙突”と呼ばれる奇怪な形の岩など、様々な形の岩の大集団が犇めきあって連なるさまは、見るものを圧倒します。それらの中には岩窟住居や岩窟教会などもあり、また地下8階まで掘り巡らされた大地下都市の存在など、全く驚嘆の他はない世界でした。またトルコには、紀元前を遙かに溯る文明の遺跡も数多くあり、ここに住んだ古代人の叡知や生活技術の高さが偲ばれます。現代人は自然を征服して、人間本位の文明を築こうとしているようですが、古代の人々は自然の力を活かし、自然と適合して、自然と共生する文化を構築したように感じました。例えばイスラムの重圧から逃れるため、キリスト教徒が築いたとされる地下都市の構造についても、空気孔や水処理の問題、外からは絶対に明けられない扉(それはただの丸い石だった)など、その技術と知恵には脱帽の他はありませんでした。今回のツアーでは、このほかにもイスタンブールの有名なトプカプ宮殿や、ブルーモスク(スルタン・アフメット・ジャミイ)アヤソフィア大聖堂に象徴される美しいモスク、そしてクレタ島のミノソス遺跡、アテネのアクロポリスなども巡りました。フィナーレは、アテネからロンドンへの空路で俯瞰したアルプスの白銀の峰々の輝き、大きな感動の旅でした。

阿蘇南郷谷の秋

～零余子のことなど～

中 村 恵 二

秋が深まり、外輪山の薄が真昼の陽光に銀色に靡くころになると、山里のあちこちに張り巡らされた針金に、巻き付いた芋づるが枯れて栽培山芋の収穫が始まる。山芋といえば、山の斜面か雑木林に自生するもので、かつては村々に何人かいる山芋掘りの名人達が、夫々独特な掘り鋤を使って掘りあげていたものだ。

時には技術未熟な不屈き者がいて、掘り散らかした穴をそのままにして、山歩きの人が難渋したという話もよく聞いた。平成の世になり、或いはそれ以前だったかも知れぬが、この山芋を畑で栽培する人が現れてきた。プラスチックの雨樋を畑の土の上に横たえ、その中に種芋を植え付ける。山芋はその雨樋の中で変形することなく、真っ直ぐに育つという仕掛けになっている。従って、収穫するときも特殊な掘り鉋などは不要で、雨樋を掘り起こしさえすればよい。わざも勘もいらす昔の山芋掘りの苦労とは雲泥の差だ。これでも自然薯と呼ぶから可笑しな話だ。熊本弁というなら畑の「鰻てぼ」だ。長さも1メートルを越すものが普通で、進物用には長い“藁づと”に入れてあり、日持ちもよいと珍重されているようだ。ところで零余子をご存じだろうか。芋蔓にくっついた実の如きものである。むかごと云えば誰でも知っていると思うが、あれのことである。山芋とは別に無人販売所などに置いてあるが、結構高い値がついている。むかご飯など季節の香り高いものもあるが、独特な臭みがあり今の子供たちはあまり興味を示さない。フライパンで空煎りして塩を振れば、ビールの摘みにはおあつらえ向きと思うのだが。中秋の山歩きの途中、雑木林で小憩の時など、山芋の蔓を見つけると帽子をすけて、むかごをパラパラと振り落とした経験を、大抵の岳人はもっているものだ。無農薬の山の幸は、今では最高の贅沢の部類に入るのではないだろうか。かつて都会っ子だった私が田舎に疎開し、村のガキ大将と山野を走り廻り、アケビをとったり、五位鷲を捕えて焚き火で焼き鳥にして食ったり、山芋の花？を鼻にくっつけて天狗様になって遊んだり…幼い頃の記憶は今も鮮やかである。「だんだんと本気になりて零余子採る」という句がある。今まで、このむかごは山芋の実だと思っていたが、葉のわきについた腋芽だそうである。それなら実はあるのか、またこのむかごを植えたら山芋が入るのだろうか。その

うち村人に聞いてみたいと、思っているこの頃である。

海外旅行雑感

川端浩文

日本山岳会の会員でありながら、近頃は山から遠ざかっている。私の今年の登山は僅か10山であった。(金峰山、二ノ岳、三ノ岳、八方ヶ岳、阿蘇高岳、高千穂峰、湧蓋山、久住山、大金峰、白鳥山) かって、夏季には本州中部の北アルプスで過ごすのを恒例としていたのに、今はそれもない。そのかわり今夏は連続3回、海外旅行をする羽目になった。それは、6/28~7/10オーストラリア、8/4~8/10タイ、8/12~8/22イギリスという具合であった。流石に疲れがでたか、タイから帰国すると発熱、腹痛が出て次のイギリス旅行が危ぶまれた。いずれも観光旅行ではなく、ホームステイ中心の旅であった。先ず、タイでは今回もバンコク空港に到着すると、多くの人々に出迎えられ、ジャスミンの花束を頂くなど歓迎を受けた。レストランでは、日本留学生の伯父、伯母、甥など一族郎党が集まり、タイ料理の珍味をテーブル狭しと並べて歓待された。日本人は外国人に親切だと云われているが、タイ人のそれは日本人に勝るとも劣らない。私の教え子(高校生)を2人連れていったが、タイ人の親日感を強く肌で感じたようであった。今回の旅も、里子(フォレスト・チャイルド)との再会が主目的であった。その自宅は町から車で1時間ほどの農村にあり、タイの農村独特の高床式の質素な家だった。母や祖母をはじめ親戚の人たちが集まり、私たちを待っていてくれた。日頃はお粥のような簡単な食事なのに、肉や魚など、特別な日にしか食べない料理がたくさん準備されていた。飽食に慣れた私たち日本人には、それほどのご馳走とも思えないのだが、手間隙かけての歓待に感動した。この国も貧富の差が著しいようで、ここに来て余り

の貧しさに啞然とするほどであった。質素な高床式木造家屋の中には、家財らしいものは何も見当たらない。また外は、凸凹のはげしい泥んこ道で、半裸の子供たちが素足で走り廻っている。敗戦直後の日本を思い出させる光景であった。連れて行った教え子の二人は、ペンフレンドの家に招かれて、数々の体験をしてきた。昨年の留学生(鹿本北高校)のタオとも再会できたが、何より嬉しかったのは、「いま大学で日本語を専攻しているが、将来は日本と関わりのある仕事につきたい」と聞いたことであった。

オーストラリアでは、交換留学の会議に出ることと、留学の世話をしているボランティアの人たちとの交流が目的であった。かつての白人優位の「白豪主義」は影を潜め、心から私たちが歓迎してくれた。留学生の派遣、受入れに伴う諸問題を、関係各国のボランティアと話し合っ解決のノウハウを、また地方の会議に参加することで運営の仕方を知ることが出来た。殊に派遣生のオリエンテーション・セミナーに参加したときは、その運営方法があまりに相違するのに驚いた。上意下達式の日本の遣り方に比べ、ここでは生徒たちが自主的に問題提起から解決まで、討議を進めていくのである。リーダーは時々必要に応じてアドバイスをするだけである。その点、日本は些か神経過敏症で、手を掛けすぎて自主性の芽を摘み取り、過保護になっているのではないだろうか。いま鹿本高校に留学しているメル(メラニー・ロビンソン)の両親が、遙々ビクトリア州から車で10時間余をかけて、シドニーまで会いに来られた。そのうえ会議の全期間参加されて、十分にコミュニケーションを図ることができて良かった。

イギリスでは、元同僚の英語教師ウエンディ先生の結婚式参列と、卒業論文の対象だった桂冠詩人・ワーズワースの足跡を辿ることが目的であった。先ずロンドンでは、広々とした緑溢れる公園が数多くあるのに感心した。そこでは老若男女が思い思いに余暇を楽しん

でいた。今回はハイドパークにあるスピーカーズ・コーナーにも立ち寄って見た。方々で自由に自分の意見を述べたり、討論をしたりしていた。あるグループはキリスト教とイスラム教の教義について、その優劣を討論していたが、お互いに一步も譲る気配がなかった。各地の自然や、古い施設など文化遺産の保存管理はきわめて良いようであった。詩人の故郷である湖水地方をレンタカーで一巡したが、生家や関連する施設、ホテルや町並み、それらを包含する全体の風景まで、よく整えられているようだった。日本ではやたらに見かける、広告や看板などは全くなかった。これはナショナルトラストの普及した、イギリスならではのことであろう。今回は、ウエンディ先生の恩師宅に3泊4日ホームステイさせていただいたが、イギリス人の生活様式や習慣の一端を知ることができた。ご夫婦とも既に退職されていて、悠々自適の生活を楽しんでおられた。こんもりした木立ちに囲まれた数百年はたつ石造りの家、庭のあちこちにテーブルを配し、気の向くままに庭で、食事や読書や談話を楽しんでおられた。林檎や梨の木が枝もたわわに実をつけ、菜園は苺や各種の野菜、花などで足の踏み場も無いくらい。倉庫にはこれらの野菜や果実がたくさん保管され、年中いつでも利用できるようになっている。ご夫婦とも名門オックスフォード大学卒業で、室内の至る所に書籍が溢れ文字通り晴耕雨読の生活。歩いて5分くらいの所にも菜園があり、案内してもらったが良く手入れが行き届いていて、雑草だらけのわが家のものとは雲泥の差があった。古代から現代までの庶民の生活を展示した歴史公園、大富豪の館や庭園、教会での結婚式と披露宴、20年ぶりのホストファミリーとの再会等々、思い出深い旅であった。



心の中の一本の木

河上洋子

“山行日和”というお天気がある。もっとも正気の沙汰かと呆れられる位、山にとりつかれていた頃は、どんなお天気でも“山行日和”であった。それが最近では少しずつ“映画日和”とでもいうものになって来たようだ。

どちらも朝から風がなく薄日が射して、カラッと空気が乾いた、そんな日がいい。小春日和なんて快適すぎて山行も映画も駄目である。映画を見に行くのは準備も要らず誰も誘わずでいいから、つい山行日和が映画日和になってしまうのである。それで最近出かけた映画の話。このところケビン・コスナーに参っているの、これも彼の出演した「8月のメモワール」のこと。内容については何の予備知識もなしに出かけたが、2時間の映画が終了しても席を立てないくらい感動した。久しぶりのことである。ケビンの父親役も素敵だった。ベトナム帰りの兵士で、心の奥深くに癒されない傷を負った男を陰影濃く演じ現代のアメリカの社会問題の根深さを感じさせた。しかしそれにも増して子供たちの演技に目を見張るものがあり、父や母、しっかりした言葉でのやりとりが実に魅力的であった。しかしここでは映画そのものを紹介するつもりではない。この映画の中で重要な舞台となった一本の樹、その大樹の見事さから思い出す私の心の中の一本の木について、書いてみたいのである。説明では、この見事な「榿の木」を探すために、何百本もの榿の木を調べあげ、地元の新報に広告を出して、読者の好きな木を推薦させたりしたという。その結果、アメリカ南部、サウスカロライナ州の小さな町で見つかった樹齢700年の榿の木が選ばれた。

深い森の中で一際目立ったその巨木は惚れ惚れする程に美しく逞しく、子供たちが登りやすい様に枝が下に向かって曲がり、殆ど地面すれすれに広がって、まこと森の巨人の風

格である。ワルガキたちは樹上にツリーハウスを作る。手をつくして板切れや鉄材を集め、梯子やロープを自在にかけて、鳥の巣のような小屋が完成する。見た目にはオンボロでも子供たちには自由の砦、そこでは激しい戦ごっこやドラマが繰り広げられる。その中に父親ケビンが語る、ベトナム戦争の痛烈な体験や、現実の生活の苦しさ、結局は人にとって愛だけが価値ある存在であることなどが、絶妙に絡みあい、子供の心に深く刻みつけられてゆく。一夏の思い出を生んだツリーハウスも、夏の終わりには取り壊されて、子供たちは少し大人になって榿の木から降りた。映画を見ながら、私も久しく帰らない故郷の、小さなお宮さんの「楠の木」を思っていた。あの木は700年にはならないだろうが、それでも私の子供の頃はもう、空高くに枝を広げていたし、いくつもの枝の分かれたところに、坐りよい瘤があった。私は下から2番目の瘤を私の場所と決めていた。その頃、村中の子供たちは幾つかの群れをつくって、その楠の木は私ども“中組”のものであった。川の近くにあったお宮の石段は、夏は殊に昇降が賑やかで、私どもは川で泳ぎ疲れると、楠の木の枝の自分の場所で昼寝をした。最上段はガキ大将の陣という具合に、大きな楠の木は何人もの子供たちをうまい具合に止まらせて、涼しい木陰と風を送ってくれた。映画を見た日から数日たって、私は無性に故郷の楠の木に会いたくなった。用事を作って久しぶりに、お宮の石段を昇った。楠の木は健在であった。

しかし、真冬の曇り日だったせい、子供の頃は天にも届くかと聳え立って見えたその木は、何となく丈が低くなった様な思いがした。私が坐った瘤もまだあった。立つと丁度、胸の高さくらいに、何人もの子供が登ったらしく、すべすべと滑らかな木の肌。しかしその上の方、昔ガキ大将が足を踏んばったあたりは、もう人の登った痕跡を留めていない。ながい間、私は瘤に坐って人を待ったが、子供はおろか誰ひとり現れなかった。本当は今

頃、お宮の庭はコマ打ち、陣取り、ゴム飛びの季節で終日子供たちの喊声につつまれていたのに。まして木に登って昼寝する子供が居る筈もないか。楠の木が少し貧弱に見えたのは、きっとそのせいかも知れない。故郷に帰った懐かしさで、私はもっと山の木が見たくなった。お宮の後ろはお寺の杜で、その続きに昔“禁忌の森”があった。お寺の開祖の墓という古い塔があって、そこに踏み入るとタタリがあると、悪童どもも近づかない一画だった。その山を思い足をのばした。大きな“ゆずり葉”の木があったのを思い出しながら、しかし何とその森は見事に切り開かれて、住宅団地になっていた。美しい竹山も、檜の森も、柿の木も嘘のように消え失せて、洗濯ものがあっけらかんと干されていた。ここで育つ子供たちは、心の中に一本の木も持たずに育つのかと、思ったのである。

雑 感

藤 木 孝 一

学生時代、登山に熱中したことがある。今から30年も前のことだ。昭和40年から4年間ほどは周囲の物事は目に入らず、ただ山、山、山の毎日だった。山岳部のシゴキ事件や、冬山遭難の批判が高まっている頃だったが、右も左もなく、真っしぐらに山に向かって生活していた。山に登ったからといって、得することは何もなかった。お金は無いし、親は心配するし…自分自身も親不孝だと思っていた…山仲間と、山の出湯などでよく話したものだ。「オッカサンな、出て来るとき何ていいなつたや?」、「うん、やっぱしいつもんごて“一銭がつもならんキツカばっかし、山登りばして何の為になつとカイ、このバカタレが!”」て云いながら、こそっと銭ばやらすもんな…こん時ばっかしは俺も涙の出つとタイ」それでも山登りは止められなかった。

冬山で一週間ほど閉じ込められ、死に物狂

いで脱出したこと…岩登りで転落して骨折したり、山の診療所で頭の傷を縫ってもらったり…。今から思うと、確かに物質的に得することは何もなかった。岩登りの途中で文字通り剣ガ峰に立った時、自分自身で解決しなければどうにもならぬ、本当に頼れるのは自分だけだと思った。また重荷を背負って一日中、下ばかり向いて歩くときは流石にきつかった。

早く楽になりたい、そう思うと一層肩の荷が身体に食い込んでくる。とうとう半ばやけくそになって考えた、この荷物をどうしても目的地まで運ばなければならないのなら、いっそこの苦しさの中に、心の底から飛び込んでやれ…そう思うと不思議に苦しさが和らいてきた。今でもこの考えが自分の生活の中心にある。

1995年の山

鶴 田 佐 知 子

昨年の私の一番の山行は11年ぶりの北アルプス、それも念願の蝶ヶ岳(2664m)、常念岳(2857m)登山であった。1984年の夏、槍ヶ岳(3180m)に登り、燕岳(2763m)、中房温泉へ表銀座コースを歩いた時に眺めた常念岳の姿が、いつも心の何処かにひっかかっていた。8月23日、新装成った徳沢園に泊まり、24日、一日かけてゆっくり長堀山(2565m)を越え、蝶ヶ岳に登りついた。天候に恵まれ、梓川を挟んで懐かしい穂高連峰が手にとるように見えた。翌日の常念岳への巨岩群の登りは可なりこたえたが、山頂からの展望は抜群で、美しい高山植物の花、花、花との再会の4日間だった。宮崎の大崩山系の山にも支部会員の広吉さんのお蔭で幾つか登ることができた。3月の支部例会で夏木山(1386m)から犬流越えへの岩稜縦走は、スリルがあり面白かった。4月もまた木浦鉦山の“梅路荘”に泊まり、新百姓山(1273m)、夏木山のアケボノツツジ、シャクナゲを楽しんだ。6月は大

崩山に登り、ササユリの健在を確認した。10月は紅葉の始まった阿蘇根子岳(1408m)にヤカタガウドから登り東峰へ縦走した。秋の霧立越も面白かった。五ヶ瀬町の民宿に泊まり、白岩(1620m)、水呑ノ頭(1646m)、灰木ノ頭、扇山(1661m)への往復は長路だったが、ポコポコと厚い落葉の道は心地よかった。昭和8年に日向～椎葉の道路ができるまでは、椎葉村の人々の生活道路だったという。私が所属するアルコウ会の例会もいろいろあった。2月の由布岳(1584m) 4月の九重・立中山は雨で途中から引き返した。5月の犬ヶ岳(1131m)はシャクナゲが美しく、6月の倉岳(682m)は海岸線から矢筈岳を越えて登頂し360度の大パノラマを満喫。9月は10年ぶりで佐賀の黒髪山(518m)青螺山(599m)に登った。5月連休の水ノ山(1510m)は千谷コースの残雪が多いため、スキー場のゲレンデの急斜面を登り雪の尾根路を山頂へ。ゲレンデではザゼンソウ、下山路の自然林の林床ではサイシンスミレ、ミヤマカタバミ、ハシリドコロの花々が美しかった。登山とは少し違うが植物関係の会では、5月下旬に大分の小田の池湿原、由布山麓の植物観察、鶴見岳山頂から鞍ヶ戸の植物観察に参加した。小田の池の高層湿原では、熊本ではほとんど見られない湿生植物を多く見ることができた。ミタケスゲ、ヌマクロボスゲ、ヌマガヤ、コタヌキモ、ミツガシワ、ミカズキグサ など。鶴見岳は二分咲きのミヤマキリシマの山頂までロープウェイで上がり、鞍ヶ戸の痩せ尾根を登って低木を見て歩いた。またこの会では10月に甲佐岳に登り、福城寺と山頂の間でモロコシソウの実、つる状のトラノオスズカケ、ヌマダイコンなどに初めて出会った。また日本山岳会科学探索登山に参加して、10月1日奥美濃の大日ヶ岳(1709m)に登った。前日は新幹線岐阜羽島駅に集合し、バスで長良川に沿って北上し、加賀白山の美濃側の登山口にある長滝神社を訪ね、高鷲村のホテル・ホワイトキャスルに泊った。翌日、リフトで1400m付近まで上がり、ナナカマドの赤い実、クマノミズキの青紫

の実が美しい灌木帯を登り、10時頃に1等三角点の山頂に着いた。天気はあまりよいとはいえ、奥美濃の山々の向こうに雲を被った白山を眺めただけだった。この山は上から灌木帯、針葉樹林帯、ブナ林と続き、植生がよく発達しているそうである。ヤマブドウの紅葉が美しい道をブナの実、ハシバミの実を食べながら蛭ヶ野高原に下る。ここはミズバショウの南限だそう。縁あって暮れの24日からニュージーランドに出かけた。26日昼頃マウントクックビレッジにつくと、マウント・ウエークフィールドの左手に真っ白なマウント・クックのピークが輝いていた。明日のフッカー谷へのトレッキングを期待して早目にベッドに入ったが、27日は朝から雨。吊橋に行きつかぬうちに雨風は更にひどくなり、昼前に引き返した。午後には雨の中、裏山のブナ林散策。残念だったがブナの種類の多いこと、羊菌類の大きいこと、その植生の違い、国立公園の自然保護の厳格さなど、この国の文化の暖かさに触れることができた。奇しくも、春の10月頃咲くというマウントクックリリーに寒い峠道のホームートネルの入り口で会うことができたのは感激だった。いつかあまり遠くない日に、今度は南島にたくさんあるというトラックを歩いて見たいものである。

マカルー登山を終えて

馬場博行

マカルー登山にあたっては、支部の皆様をはじめ多くの人々から暖かいご支援を頂きました。誠に有り難うございました。

私にとって、マカルー登山は2回目になります。1回目は1985年冬期に、ネパール側の北西稜から挑んだのですが、残念ながら冬特有の強風に阻まれ7530mで敗退しました。今回はその反対側のチベットからということで、たいへん興味深く、また有意義な登山となりました。私たち本隊は3月9日にネパールからチベットに入りましたが、チベットは7年

ぶりの大雪のため、登山活動に大きな支障を与えました。雪が深くBCまでの隊荷の輸送は困難を極めました。BCに到着した隊員は順次、休む暇もなく悪天候を衝いて上部キャンプへのルート工作、荷上げ、設営に当たりました。希薄な空気の中、20kg近い重荷を担いで苦しい登攀が続きました。そんな中で私が一番気がかりだったのは、隊員の危険に対する意識が薄れていることでした。疲労し切った体では、足を前に踏み出すのがやっとという状態でした。快晴の時は日中の気温が35度を越える日があり、強烈な日射しが周囲の雪と氷を溶かし、すさまじい轟音とともに雪崩を発生させます。夜になるとマイナス25度まで気温が下がることもあり、実に一日の温度差が50度を越えるという有様でした。苛酷なまでの環境、大自然の情け容赦ない咆哮の中、常に危険と背中合わせで、一步一步頂上を目指したのです。そして5月21日、22日の両日にわたり、前人未踏のチベット側から8名の若い隊員が、頂上に立つことができました。輝かしい記録的な登山であったと思います。私自身は、ファイナルピークに立つことはできませんでした。しかし、これからの日本の山岳界をリードして行くであろう若者たちへの技術指導と、高所での生活技術について多少なりともアドバイスができたことで、十分に自分の役割は果たせたのではないかと考えています。こうして、90日間にわたる厳しい挑戦は終わったのです。これは大自然に比して、あまりにもちっぽけな人間の能力の限界への挑戦でもありました。この次はもう少し気楽な、しかしまだまだ自己への挑戦をと考え、中央アジアのタクラマカン砂漠の走破に、夢を馳せているところです。

春の屋久島行

神谷平吉

平成7年5月26日、NHK熊本の奥田局長さんのご希望もあって、「シェルパ阿南」の

阿南さんに同行して頂き、ご一緒に屋久島を訪ねた。屋久島に行くのも以前に比べるとたいへん便利になった。鹿児島新港から高速船ジェットフォイル「トッピー」に乗ると、種子島経由でも2時間半で宮之浦港に着く。熊本を発つときから、どんよりと曇っていたが、次第に雲が厚くなって船中より雨になった。前回の屋久島行も2日間雨ばかりだった。9合目の翁岳斜面にテントを張り、翌朝は風雨を衝いて宮之浦岳の山頂を踏んだものの、空しい想いだけが残った。果たして今回はどうなることだろう。港からタクシーで白谷林道を南下する。約30分で白谷雲水峡入り口に到着。此処は辻峠を経て小杉谷に至る楠川歩道の中間点で、晴れていれば天然照葉樹林帯の散策を楽しむつもりだった。しかし意外に強い雨足に追い返されるように、溪谷美を垣間見ただけで宮之浦へ帰ることにした。林道沿いには、羊菌類をはじめ亜熱帯の植物群が豊かに繁茂している。途中、ボスらしい大猿が悠々と毛づくろいしている光景に遭遇することができた。当夜は宮之浦ホテルに泊まり、翌早朝、タクシーで迎えにきてくれた阿南さんと共に安房へ向かう。安房林道に入ると次第に空が白み、昨日とは打って変わった快晴となった。ヤクスギランドの近くで車を止めると、眼下深くに荒川の溪流が望まれ、目を上げると太忠岳山頂に近く、天中石が尖鋭な岩頭を突出して興味をそそった。暫く行くと樹齢凡そ3000年といわれる「紀元杉」の巨木(根回り30m、胸高囲13.5m)が立っていた。その周辺には、薄いピンクのヤクシマサクラツツジが満開で目を楽しませてくれた。午前6時30分、安房林道と尾之間歩道が交差する淀川登山口に到着した。淀川小屋までは少し登ったあと、暫く尾根を廻り込むように歩いて40分ほどの行程である。丸太小屋の裏手には深く澄んだ淀川が、音もなく静かに流れていた。鉄製の橋を渡ると、本高盤岳より派生した急峻な尾根の登りとなる。途中、三分咲きのヤクシマシャクナゲが点在していて、その鮮や

かな色合いにはハッと目を見張る思いであった。午前9時、高盤岳展望所で小憩。見上げる高盤岳山頂には、豆腐を縦に切ったように奇麗な割れ目が入った巨岩が乗っかっていて、興味深い。ここから小花之江河までは、ほんの一投足であった。ミズゴケの湿原が広がり、点々と水たまりが散らばる中に、矮小化したヤクスギが枯木と交じりあい、珍しい景観を呈している。ここから更にピークを越えると、標高1600mの高層湿原「花之江河」に到達する。背後に黒味岳(1831m)が聳え、大小の岩石や灌木、枯木が絶妙なバランスで配置され自然が造った山上庭園である。灌木の中をジグザグに登りつめると、黒味岳への分岐路、黒味分かれに出る。それから暫く行くと小さな投石湿原を越え、巨岩が散らばる投石平に到着。しばしの憩いを楽しんだ。

既に森林帯を抜け出て、一気に視野が広がる。山肌一面に敷き詰められたヤクザサの所々に、背の低いヤクシマシャクナゲの群落が、三分咲きの花を綻ばせて風景に一際彩りを添えている。安房岳(1830m)、翁岳(1826m)の西斜面を行くトレイルは、そこ彼処から清冽な水が滾滾と湧き出て、宮之浦岳登山に一つの魅力をそえている。翁岳の鞍部から栗生岳を経て、巨岩のある前山を幾つか越え、正午過ぎにようやく海拔1935m、九州最高峰の宮之浦岳山頂に立つことができた。晴れ渡った山頂からは、西方視呼の間に永田岳の威容が望まれ、それからぐるりと360度遮るものがない壮大な山岳景観を前にして、声もなく立ちつくした。林芙美子が小説『浮雲』の中で、「一ヶ月に35日雨が降る」と記しているほど雨の多いこの島で、幸運にも快晴に恵まれて、その素晴らしい山容に接し、奥深い大自然を満喫することができた幸せを、今なおしみじみと噛み締めている。

花の山旅

神谷文子

昨年春は、前の年に雨が少なかったせいか、十数年ぶりといわれるほど色鮮やかに山の花々が咲き競いました。それで、私たちはこのときとばかりに美しい花を訪ねて、幾つかの山行を楽しみました。5月初めの連休には霧島山の花を訪ねました。えびの高原から韓国岳(1700m)に登る途次、淡黄色のキリシマミズキが今を盛りと咲き誇り、山路を辿る者の目を楽しませてくれました。山頂間近に、大きく口を明けた韓国岳の火口を展望できる所がありますが、火口壁の木々の間にも黄色い花が縞模様霞んで見えます。翌日は高千穂峰(1574m)に登りましたが、下山するとき、はお鉢(火口縁)をぐるりと廻りこんで、ガレ場の下降路にかかる辺りから、灌木帯を下る別ルートを探りました。道々、そこ彼処にミヤマキリシマが可憐な花を着けていて、ガレ場のルートよりずっと楽しい下りでした。月半ばには、祖母山系の傾山(1602m)に登りました。上畑から観音滝、三つ尾を経て北尾根に登りましたが、緑の木々の間に満開のミツバツツジが点在して、目の醒めるような美しさでした。途中、アオスズ谷側の一般ルートと別れて三ツ坊主、二ツ坊主などの岩峰群を経由するハードなルートに入りました。折悪しく雨になりましたが、群生するアケボノツツジは丁度満開で、雨に濡れそぼり雫を滴らせる花の趣は、例え様もない美しさでした。

岩稜の難路を辿る緊張感が、一際この花の美しさをかきたててくれたのでしょうか。傾山山頂から九十折越を経由して下山しましたが、途中ヤマナシの花に出会い、小屋のまわりでは再び満開のミツバツツジの歓迎を受けました。下旬の26日から長駆して屋久島行です。曇り日が屋久島に着くころから雨になり、白谷雲水峡は入り口の溪谷を僅かに眺めただけでした。翌27日は天候がすっかり回復して、

雲一つない晴天となりました。淀川登山口へ向かう車中から、満開のヤクシマサクラツツジの花を見て期待が膨らみました。淀川小屋を過ぎて暫く登る頃から、三分咲き位のヤクシマシャクナゲが目につきはじめ胸の躍る思いです。投石湿原付近のヤクザサが広がる中に、灌木のヤクシマシャクナゲが点々と彩りを添えています。この日は淀川登山口からの日帰りピストン登山でしたが、終日快晴に恵まれて花々に埋もれての山歩きを楽しむことができました。6月中旬には、日の尾峠から阿蘇高岳に登りました。鍋の平の草原からふり仰ぐ高岳は、例年の眺めと異なり7合目から上はすっかりピンクに染まり、期待に胸が躍りました。途中、尾根を分けるピークに到達するころ、ナナカマドの白い花が見られました。ここから東峰山頂まで、斜面一帯に満開のミヤマキリシマの群落が広がり、身も心もピンクに染まりそうな、満ち足りた一時を過ごしました。山頂の大鍋(浅い火口)の内側にも、ミヤマキリシマのピンクの花が広がり、天狗の舞台の岩峰をバックに、花に囲まれて昼飯の美味しかったこと…このようにして昨年は、春から初夏にかけて花の山旅を続けることができ、心豊かな思い出のケルンをまた一つ築くことができました。

初めての屋久島行

長田光義

平成7年8月11日、仕事を済ませ午後8時に、台風発生の有無を確認して、ひとりマイカーで本渡市を出発した。松橋ICから九州自動車道に乗り入れ、開通したばかりの加久藤トンネルを通過して、日付が変わった12日午前1時に、鹿児島港名山栈橋に到着した。9時、フェリー屋久島2号で出港。12時45分、宮之浦港着。出口は盆休みの帰省客と旅行者で溢れ、なかなかタクシーが拾えない。やっとタクシーに乗り、14時に白谷雲水峡に着いて歩き出す。16時、辻峠に着いてテントを張

る。翌早朝、辻峠を出発し、小杉谷の森林軌道跡を経て大株歩道を登る。10時10分、やっと念願の縄文杉に着いて感激の対面。10時45分に高塚小屋、12時15分に新高塚小屋を通過してひたすら歩く。第1、第2展望台を過ぎる頃は体力の限界、しかし15時30分遂に九州最高峰の宮之浦岳山頂に立った。次第に雲量が増し、遠雷の音に追われるように早々に下りにつく。17時10分、投石岩屋付近で幕営。キャンプ禁止区域だが仕方がない。夕食を終えた頃から物凄い大雷雨となった。軽量化のためフライシートを持参しなかったので、テント内はプールになり、シュラフはビショ濡れ、朝までガタガタ震えていた。14日、5時40分に出発。花之江河、淀川小屋を通過して9時30分、荒川林道に出た。11時40分、屋久杉ランドに着いた。シュラフを濡らしているので、テント泊の予定を変更し、民宿に泊まることにしてタクシーで下る。夕方まで雨が降ったり止んだりしていたが、宿願の屋久島縦走を果たしたことで、カラリと爽やかな気持ちであった。15日、13時のフェリーで屋久島を離れ、17時10分、鹿児島港に着いた。九州自動車道はえびの付近で大渋滞、また松橋ICを出た所で大雷雨に会う。日付が変わった16日の午前1時にやっと、しかし無事に我が家に帰り着いた。これまで何度も計画しながら、台風などのために実現しなかった宮之浦岳に登ることができた。嬉しいことだが、いろいろと反省点もある。今回、私のとったコースは、一般的には順路ではなく逆路であったこと。それは登山口の高さや、コースの高低差などの点で不利だったと後で知った。次に、永田岳まで行きたかったのに、体力や時間的に無理があり残念だった。また雨の多い屋久島では、当然のことながら、フライシートは必携品であることを身をもって知った。屋久島の山の奥深さと大きさには、駆け足の登山ながら強い印象を受けた。また行ってみたい山になりました。

ダマーヴァンドに登る

池崎浩一

「ダマーヴァンドに登らないか」と本田さん(支部長)に誘われたとき、私はその名さえ知らなかった。コンサイス外国山名辞典をひいたら「イランの最高峰。カスピ海南岸一帯のエルブルズ山脈の主峰。テヘランの北東約80軒。高5671m」とあった。高所登山の経験も、体力にも自信はなかったが、未知への興味と山の高さにひかれて、早速、ツアーリーダーの桑原信夫氏(1990年、日・韓エベレスト合同登山隊長)に参加の意志を伝えた。当初、私がこの山について知りえたことは、前述の外国山名辞典にある程度だったが、日を追って資料も集まり出した。1964年の脇坂順一先生の記録、1968/69マウンテンワールドに掲載されたヘルベルト・メーダーの紀行文、1971年の早大山岳部冬季合宿記録、更に同年は、長野市のグループ・ド・モレーヌを中心とする登山隊が、イラン山岳協会のメンバーと共にイラン国内の山に合同登山をしたこと…そしてそのことが1976年の日・イ山岳協会隊によるマナスル合同登山のきっかけになったことも解った。そのほか富山県岳連や、愛知県岳連等々数多くの登山隊が出かけていることも知った。8月11日、一行5名が成田空港ロビーに勢揃いした。最年少は51才の女性で最年長が70才の私、平均年齢63才の中老年パーティである。私を除いては何れも海外登山の経験豊かな人達で、早くからダマーヴァンド登山の機会を待っていたようだ。テヘラン上空にさしかかった機内から、私はダマーヴァンドに初見参した。それは重畳たる山並みの中に一際高く、均整のとれた姿で屹立していた。私達は空港でイラン山岳協会の人達と合流すると、専用車でダマーヴァンド南麓の登山基地レイネ村に直行した。登山者用のゲストハウスは40坪ほどの石造の平屋建で、自炊、宿泊ができるようになっている。ここから山頂までは、通常3日あれば往復でき

るそうだが、私達は5日間を見込んだ。8月13日朝、小型トラックに荷物を積み込み、その上に乗ってレイネを出発する。間もなく山道に入ると砂塵を巻き上げ、凸凹の激しい悪路をジグザグに登る。50分ほどで青い丸屋根のある一軒家についた。標高は2900m、早速隊荷は馬に積み替え、私達はサブザックの軽装で、アザミヤケシがまばらに生えた、石ころの多い灰色の斜面を登った。ヤバーシュ、ヤバーシュ(ゆっくり、ゆっくり)で7時間もかかって、やっとシェルター(4150m)についた。ここにはコンクリート造りの小屋があるが、私達はテントを張ってB・Cとした。高度の影響かトイレに行くにも息が弾んだ。翌日は高度順化のため5100mのH・C予定地を往復する。下から見当をつけていたH・C予定地は、右側懸崖にかかる小さな氷瀑の下であったが、実際はそれより可なり左手の岩稜テラスで、高度も4760mであった。8月15日、ゆっくり登って先行のイラン人が設営したH・Cに入る。夜半から霰が降りだし、風も加わってテントをばたつかせていたが明け方には止んだ。天気待ちで出発が遅れたが、打ちそろって山頂を目指した。H・C上部の岩場を乗り越すと、あとは火山礫の堆積した砂混じりの大斜面が、山頂まで続いていた。しかし、いくら歩いても山頂は近くならず、同じところを歩いているよう……つくづく山の大きさを実感した。頂上近くになると硫黄の臭いが鼻をついた。H・Cから3時間半、10時40分に最高点の大岩の下に辿り着いた。そこには別のイラン人のパーティがいて、日本人と知って一人一人から握手と頬ずりの祝福を受けた。底の浅いカルデラの縁に立って見たが、対岸の火口壁が見えただけで、ガスに遮られ期待した展望は得られなかった。腰を下ろすと寒いので、立ったまま乾パンを頬ばった。イラン人が持参した(IRAN & JAPAN Mt.DAMAVAND JOINT EXPEDITION 1995)と書かれた引き幕を広げ、登頂者全員の記念写真をとり下山する。H・Cには、体調を崩して途中から下山した本田さんと、

桑原リーダーが待っていて握手して登頂を祝ってくれた。私の今までの最高到達点が、玉山の3997mから、一挙に5671m（この高さには異論があり、GSGSの地図では5601m、前日登頂した他の日本人パーティの高度計では、5390mだったという）に引き上げられた喜びを実感している。だがこれは、桑原リーダーの適切な登山計画と、イラン山岳協会の人達の献身的な協力があったからこそと痛感している。今回のイラン人パーティのリーダー、ヘンデイ氏は、帰国の前夜テヘラン市の体育館に1976年日・イマナスル合同登山隊のメンバーを含むイラン山岳協会関係者60名を集め、「日本ダマーヴァンド登山隊歓迎会」を開いてくれた。予想もしなかったことで、イランの人達の並外れた好意に感激した。山も楽しかったが、カスピ海へのドライブも深く印象に残った。少しはイランの文化にも触れ、イラン岳人との交流も出来たことは私にとって二重の喜びであった。

登れない山

深堀弘泰

山に登れなくなってもう5年になる。いつかはまた登りたいという願いは持ち続けて来たが、体力は衰えるばかりである。体の故障もいろいろだが、その最たるものは腰痛である。それは5年前の夏、山の急坂を登っていて突然発生した。両足に痙攣を起し七転八倒の苦しみを味わい、同行の人に大変な迷惑をかけた。以来平地を歩いても、しばしば軽い痙攣を起して立ち止まることがある。こんな状態では、高い山は怖くて登れない。だから最近では、専らテレビで山の姿を追うばかりである。私のように鬱屈した気持ちで山を想う人も、数多いのではないだろうか。登りたくとも登れないこの気持ちを、ほかの人はどのように処理していただけるのだろうか。教えていただきたいという思いが強いこの頃である。NHKの衛生放送、「素晴らしき地球の旅」という番組が連夜放映された。地

球上には、こんなにも美しい所があるのかと深く感動した。なかでもアラスカの氷の波には一驚した。クレバスだらけの灰色の凍土の大きな波には、さながら神々の世界に入りこんだような、敬虔な気持ちにうたれたものである。先日、二人の孫がいる私の娘の家を訪ねた。雑談の中で娘は「いまお父さんは、行けるなら何処に一番行きたいね」と聞いた。そして「きっとハワイか、南フランスかイタリアでしょう」と云う。私は「いや、南米の山々を何日も眺めていたり、雪と氷のアラスカか、生き物の影もない砂漠で落日を眺めたりしたい」と云うと、娘は「ふうん、やっぱ自然か…」と暫く私の顔を眺めていた。心の中では「親父は人間嫌いになったのか」と思ったのかも知れない。

山の名に魅せられて

後藤之俊

初めて悪沢岳の名を知ったのは10年余り前であるが、この山には妙に興味をそそられた。ワルサワという文字にはなぜか悪餓鬼を連想させるものがあつた。永年の宿題を漸く果たしたのがこの山行である。日程は7月20日から6日間を見込み、静岡から榎島に入り、赤石、荒川三山(前岳、中岳、東岳=悪沢岳)、千枚岳、榎島と一回りすることにした。

1日目…静岡駅で東京から来る友人と待ち合わせ、9:50のバスで終点の八木又上へ(本来の終点は第一畑薙ダムであるが、道路決壊のため不通)。途中から雨になり、ガスが視界を奪う。終点から荒川を徒渉する巻き道を40分。たっぷり汗をかいて道路に出ると、榎島ロッジの送迎リムジンバスが待っている。第二、第一、と畑薙ダムを右に見ながら1時間半、榎島に着いたのは16:30であつた。幾棟もあるロッジに泊まり客は総勢20名。天気は益々悪くなり、数日間は雨との予報に気分が滅入る第一夜となつた。**2日目**…朝から強い風雨。諦めて引き返すパ

ーティも現れた。決行組は皆我々とは逆回りのコース。幸い今日は赤石小屋泊まりで樹林帯を歩く。7:00に小屋を出る。急登続きで楽ではないが、木々の緑が気持ちを慰めてくれる。14:30赤石小屋着。ほかに客はなく、無口だが親切な主人のもてなしに、萎えた気力も回復する。夕刻、一瞬ガスがとれて眼前に聖岳がくっきりと姿を現した。

3日目…風は強くないが、雨は小止みなく続く。予報は更に悪化するという。暴風雨になったら引き返す、そう決めて9:00出発する。富士見平を経て赤石コルに着くまで、増水した急峻な沢を何度徒渉したことか。そしてガレ場の急登。漸く稜線の赤石コルに達すると、案じていた通りの強い風。ガスで全く視界はきかず、赤石山頂往復はカットして大聖寺平へ向かう。深いガスに閉ざされた中を、暴風雨にあおられながら小屋に着いたのは16:30であった。客は併せて4名。小屋番の梶光信さんは衛生放送「日本百名山」の塩見岳で案内役をした人である。ご自慢のカレーライスが美味しく、冷え切った体は一気に暖まった。

4日目…「今日は天気がよくなってくるよ」と梶さんのご託宣。ガスも濃く雨も降っているが、四囲は昨日までよりずっと明るい。6:00に出発。前山のコルまでガレ場の急登が続く。チングルマ、イワカガミ、イワベンケイ、ハクサンイチゲなど高山植物の群落と、時折姿を見せる雷鳥が目を楽しませてくれる。コルに着くころはついに雨も止んだ。コルから中岳までは一息だった。やがて避難小屋を過ぎると悪沢岳の急登となる。滑りやすいガレの難路を経て荒川三山の主峰、悪沢岳山頂(3141m)に立つ。山頂周辺は不格好な岩塊が重なり合い、奇怪でどこかユーモラスである。悪餓鬼のイメージは当たらずとも遠からずか。ガスに遮られて視界が殆ど利かないのが悔しい。山頂からは殆ど下り道。丸山を越える頃から、北東方向のガスが晴れて視界がかつ然と開けてきた。富士をはじめ河内、蝙蝠、塩見それに策ヶ岳山系の山々が青空をバックに

くっきりと浮び上がっている。ザラザラした急斜面を足元に注意しながら千枚岳へと向かう。振り向くとガスがとれて悪沢の頂きが見える。千枚岳の山頂では、富士の秀麗な姿に一際感動させられた。あとは千枚小屋まで30分余の気楽な下り。途中大休止して酒盛りをしたため17:00着。小屋は榎島からの登山客で満員に近い。夕刻、落日に染まる“赤富士”を初めて見た。まさに絶景である。

5日目…朝から快晴、この日は榎島まで下るばかり。6:00に出発する。樹間からは赤石、荒川三山、千枚岳と辿った山々がパノラマになって展開する。蕨段、小石下を過ぎ大井川の本流にかかる滝見橋を渡る。11:00、榎島のロッジ到着。榎島はその名の通り、榎(サハラ)の木が林立して、その中に広い敷地を持つロッジがある。ロケーションが実に素晴らしく、避暑地さながらの爽快な別天地。ひと休みしたあと、沸きたての風呂に入り山旅の汗を流す。風呂からあがり下駄履で周辺を散歩している間に、ロッジはほぼ満員になっていた。

6日目…山旅の最後は温泉で締めたいと、かの寸又峡へ向かう。リムジンバスは9:00出発。往路に徒渉した大井川は、増水して渡れず。山越えの高巻き道を1時間、大汗をかく。静岡行きバスに乗り換えて山峡の宿に着いたのは16:00時過ぎであった。

晩秋の八ヶ岳縦走

太田章雄

日本山岳会創立90周年記念式典に出席する本田支部長の日程に併せて、新雪の八ヶ岳連峰縦走を計画した。メンバーは平均年齢67才の4名。10月15日夜、上諏訪の諏訪湖荘に全員が集合し、翌早朝、朝昼2食分の弁当を作ってもらい、JR及び諏訪バスを乗り次いで美濃戸口に向かう。バスの車内は、他に若い登山者が1名ただけで貸切り同様。原村を過ぎる頃から右側の車窓に、南アルプスの山々が次第にせり上がってきた。北アルプスの

山々の連なりも遠望され素晴らしい景観である。美濃戸口の終点でバスを降り立つと、秋冷の気が一気に身を包んだ。バス停前の八ヶ岳山荘に入り、暖かい山菜そばを注文して、朝食の包みをひろげる。9時きっかりに柳川右岸沿いの車道に第一歩を踏み出した。前日の天気予報では曇時々雨とあったが、幸いにも快晴に恵まれた。朝の日差しがこぼれる、黄葉した白樺や落葉松の樹林帯を歩くのは楽しい。約1時間で赤岳山荘に着いて小憩。ここから柳川南沢沿いの細い登山道を登る。道々美しい黄葉、紅葉や、大きな綿毛をいっぱい着けた珍しい植物(キク科?)などを見つけると、その都度カメラのシャッターを切るのに忙しい。狭い谷あいから平坦な白河原に近づくにつれて、右手に阿弥陀岳、左前方に横岳の西壁、大同心、小同心が荒々しく突っ立ち、挑戦したくなる光景である。程なく行者小屋について、赤岳主峰の西壁や横岳を眺めながら、昼食の弁当を食う。13時15分、いよいよ赤岳への最短コース、文三郎道の急登にかかる。ガラ場の急傾斜には、鉄梯子や鉄鎖が取り付けてあり安全ではあるが、アルバイトを強いられる。しかし頭上の赤岳主峰をはじめ阿弥陀岳、中岳、振り返れば横岳、硫黄岳に連なる山岳景観が素晴らしい。14時40分、比高差450mを登りきって赤岳南尾根の肩に出た。寒風が吹きつけて汗ばんだ体を急激に冷やす。山稜を千切れ飛ぶ雲、これも絶好の被写体だが一瞬のうちに変化してしまう。赤岳山頂へは岩場の連続、疲れた体に鞭打って慎重に登る。15時25分、霧に包まれた赤岳南峰2899mの三角点に着いたが、寒気にたまらず早々に赤岳頂上小屋にとびこんだ。翌払暁、厳寒の山頂に立ってご来光を待つ。やがて雲海の彼方、秩父連山の上空を紅に染めて10月17日の太陽があがった。素晴らしいご来光である。6時40分、急な岩稜を一気に下り縦走開始。鞍部の赤岳天望荘から日ノ岳、石尊峰、三叉峰と名づけられた岩峰を、岩の感触を楽しみながら登る。8時20分、横岳最高点の大

権現(2829m)に着き暫くは四囲の大展望を楽しむ。孤高を誇る富士山をはじめ、南アルプス、中央アルプス、木曾御岳、乗鞍岳、北アルプス、浅間山と上信越の山々をぐるりと見渡しなが、時の経つのを忘れる程だった。鎖場の難所を下り奥ノ院、台座の頭などのピークを通過する。大ダルミの硫黄岳山荘から広い尾根をケルンに導かれながら硫黄岳へ登る。だだっ広い硫黄岳の山頂から再び大パノラマの眺めを楽しんだ後、凄まじい東面の爆裂火口を振り返りながら夏沢峠への急坂を下る。狭い鞍部に立つ「こまくさ荘」に立ち寄り、ジュースなどを飲みながら、暫く小屋の主人と歓談する。10時35分、白い立ち枯れ木が混じる樹林帯の道を箕冠山を経て根石岳へ。途中、広い原の外れに立つ根石山荘には「風呂あります」の看板があり、何とも面白かった。円頂の根石岳で少し早い昼食とする。11時50分、最後のピーク東天狗岳(2640m)への短い登り。山頂から行く手の方に、蓼科山や稲子岳の立ち枯れ白骨木が織り成す縞模様の山腹が見える。色を失った水墨画を見るようで面白い眺めだ。ここからは下りばかりだが、慎重に岩壁を下ると「天狗の奥庭」を経て黒百合平まで、大石がゴロゴロとした難コース。膝頭をガクガクさせながら石の上を飛び渡り大いに消耗した。やっと黒百合ヒュッテに下り着いて小休止、小屋横の冷たい水を呑んで一息ついた。しかし、ここから信玄の隠し湯と云われる「渋の湯」までは、転石の多い歩き辛い道で、更に深く抉れた掘割道をうんざりするほど下る長い道程だった。14時50分の最終バスには間に合わず、15時20分到着。タクシーを呼んで茅野へ下る。

初めて登った山

加藤 功 一

昨年1年間の山行日数30日は、まだ会社勤め現役の私としては、よく行っている方だと

思っていた。しかし支部会員の皆さんの話をお聞きしていると、恥ずかしい思いがする。

私のこの頃の登山は、居住地に近い熊本西山三山、三ノ岳(681m)をホームグラウンドにして、たまには手近な小岱山(501m)八方ヶ岳(1051m)鞍岳(1118m)にも足を向けていた。だが今年(1995年)は、まだ登っていない山にも行って見ようと思い立ち、九州脊梁に近い目丸山、雁俣山、洞ヶ岳、九重山群の黒岳、福岡の福智山などに初めて登った。以下その折の感想を記してみたい。

△目丸山(1341m) 新年早々に登ったが、雪が足の踝まであり先行者がいないので、文字通り処女雪に自分の足跡だけが残し、久しぶりに雪山の楽しさを満喫した。

△福智山(971m) 若いころ福岡に勤務していた時から念頭にあった山だが、娘夫婦が北九州の小倉に転勤になり、泊まりがけで遊びに行った序でに登った。快晴に恵まれて山頂からは360度の大展望。関門海峡の海と山とのコントラストが強く印象に残った。

△九重・黒岳(1587m) 隣あっている大船山には毎年初日の出を見に登っているのに、黒岳にはついぞ登る機会がなかった。8月、別府湾ジャズコンサートの帰途に男池から登った。真夏のたいへん暑い日だったが、谷を歩いていると足元から時折涼しい風が吹き上げてくる。あれはどういう現象だったのだろうと思う。

△雁俣山(1315m) 洞ヶ岳(997m)いま私の勤務地が宇城地区(宇土郡、下益城郡)にあるので、仕事で管内を回るとき、この二つの山はいつも目についていた。何時でも登られると思いながら一年を過ぎたので、思い立って2山纏めて登った。両山とも展望はよかったものの、梯子酒ならぬピークハンティングしただけの気持ちが強い。

△これからの山登り 日本200名山というのがある。このうち私が今まで登った山をマークしてみると、まだほんの少しであるのに気がついた。これからは、この200名山に登ることを目標としよう。とりあえず九州で残っ

ている尾鈴山から始めよう。

槍ヶ岳を目指して

～新入会員の自己紹介～

井手 雅 捷

私は昨年(平成7年)10月、矢毛石先生(歯科医師)と本田支部長のご紹介により入会させていただきました。会員番号は12113番です。長い歴史と伝統のある日本山岳会に入会することができて、たいへん嬉しく、また誇りに思っているところです。私は登山を始めてからまだ5年、山行回数も228回という短い経験しかありませんが、この中でとりわけ印象に残っているのは、最初の登山(九重山)と昨年夏の初めての北アルプス登山(燕～大天井～槍)でした。殊に北アルプスを代表する表銀座コースの縦走は、それまで九州での日帰り登山しかやっていない私にとっては、遠征登山ともいうべきものでたいへん緊張しました。しかし道々展開するお花畑や、東鎌尾根の岩稜などアルペンムードが漂う山旅にすっかり疲れも吹っ飛んでしまいました。燕岳山頂付近の、白い花崗岩と緑のハイマツのコントラストの美しさ、まさに雲上の楽園でした。人工美とは違った大自然の大らかな美しさに酔い痴れる感じでした。ここからの大展望は期待以上のもので、眼前に一際高く聳える槍ヶ岳の雄姿に圧倒されました。私の拙い表現力では、とても書き表すことのできない眺めでした。初めて見るコマクサの花、ハイマツの間から顔を覗かせる九州では見ることのない小さなシャクナゲの花など、疲れを忘れさせる稜線漫歩を楽しみました。歩一歩と槍ヶ岳の穂先が眼前に迫り胸が弾みました。途中、赤岩岳稜線の東側辺りと思いますが、何と猿の群れに出合ったのです。野生の猿との対面も初めての体験でした。また幸運にも、絶滅を心配される雷鳥とも会うことができました。私のすぐ側を暫くの間、山旅のお供でもするように歩いてくれたのです。お花畑や緑の樹林帯

の美しさと対照的に、西岳辺りから見た、荒々しい槍ヶ岳東鎌尾根の岩稜の眺めは圧巻でした。いよいよ東鎌尾根にかかる、それまでのルートと一変して、鎖や梯子が連続する岩稜歩きになりました。今回の縦走コースは話には聞いていたものの、私にとっては変化に富んだ素晴らしい魅力溢れるものでした。初心者の方に同行していただいた、お二人の先輩にはたいへん感謝しております。私にとって未知の世界だった山を垣間見ることができて、人生の視野が大きく広がった思いです。まだ僅かな期間ですが今では生き甲斐の一つになって、山への深い憧憬が私を支えています。今回、日本山岳会の末席に加えていただきましたが、その名に恥じないように努力したいと思っています。どうぞ宜しくお願いいたします。

会務報告

◇春季例会(大崩・夏木山1386m)

日 時 平成7年3月18日～19日 2日間
場 所 大分県南海部郡宇目町本浦山民宿「梅路」
内 容 当初の参加予定者14名が、急病や所用のため7名になってしまった。それでも民宿「梅路」では囲炉裏端で名物の猪鍋、シカ刺身、山菜料理にカッポ酒と、大いに盛り上がった。翌早朝7時に出発。大切り峠、天神原を経て藤河内溪谷に入る。荒れた林道は夏木新道入り口の手前で、ガケ崩れのため通れない。車を置いて歩く。夏木新道は、いきなり尾根の急登。30分ほどでヒノキ林の檜見平に着く。アケボノ平はそれとは知らずに通過。ブナ、ツガ、ヒメシャラなどの自然林の斜面をひたすら登る。「船石」を越えると主稜線の分岐路に着く。左へ10数分で、寒風が吹きすさぶ夏木山の広い山頂。中央に3等三角点の標石。小雪も交じり展望は定かではない。寒さに追われるように山頂を後にする。時間が早いので、北に延びる大鋸、小鋸の鋸尾根を犬流越しまで縦走することにする。大鋸5峰、小鋸5峰と岩峰が鋸の歯のように続いている。し

かし難場には、ジュラルミンの梯子が架けられて危険はない。79才の和仁古さんも元気にクリヤーして行く。犬流越しから急峻な小尾根を約1時間下り、下の林道に出た。林道を1kmほど下り、タイムリミットの15時きっかりに車止めに帰り着いた。

参加者 西沢健一・本田誠也・和仁古昇・広吉 功
・鶴田佐知子・丸尾龍一・太田章雄
計7名

◇第1回支部委員会

日 時 平成7年4月2日(日)18:00～
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 支部年次総会議案検討
出席者 本田支部長・和仁古副支部長・田上常任委員・河上委員・広吉委員

◇平成7年度支部総会

日 時 平成7年4月23日(日) 17:00～20:30
場 所 熊本市大江5-2 N T T 熊本会館
内 容 平成6年度事業、会計及び監査報告
平成7年度事業計画、予算案
役員改選 委員は次期委員会に付託
会計監事 神谷平吉(新任)
～懇親会～

出席者 本田支部長・和仁古副支部長・田上常任委員・中村委員・広吉委員・西沢健一・宮崎豊喜・池崎浩一・深堀弘泰・後藤之俊・太田章雄・松本莞爾・川端浩文・広永峻一
計14名(委任状17名)

◇屋久島自然観察登山(主管・福岡支部)

日 時 平成7年5月27～29日 3日間
場 所 鹿児島県熊毛郡屋久町安房屋久島ロイヤルホテル 宮之浦岳(1935m)登山
内 容 5/27 屋久杉自然館で「屋久島の自然を守る」セミナーあり。5/28 福岡支部の野田多恵子さんをチーフリーダーに8班(約100名)編成の大部隊で淀川を經由して宮之浦岳に登る。夜は屋久島ロイヤルホテルで盛大に懇親会を開き、全国から参集した会員と交歓した。
参加者 本田支部長・西沢支部顧問・池崎浩一・太田章雄 計4名

◇平成7年度通常総会(日本山岳会) (支部長会議)

日 時 平成7年5月20日(土)
場 所 東京グリーンホテル(水道橋)

出席者 本田支部長

◇第2回支部委員会

日時 平成7年6月11日(日)

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 通常総会及び支部長会議報告
マカルー登山隊報告
役員改選(総会付託事項)
委員は全員重任とする。

出席者 本田支部長・和仁古副支部長・田上常任委員・河上委員・中村委員・広吉委員
計6名

◇九州ブロック記念集会(日本山岳会創立90周年)

日時 平成7年6月17日～18日2日間

場所 大分市府内町 コンパルホール
記念山行 九重・平治岳(1643m)

参加者 西沢支部顧問・馬場博行・田上敏行
石井久夫

◇夏期例会(ビールパーティ)

日時 平成7年8月27日(日) 18:00～

場所 熊本市千葉城町 熊本厚生年金会館

内容 開宴に先立ち馬場博行会員からスライドを使って「マカルー登山報告」あり。苦闘の後、勝ち取った登頂成功に大きな拍手が湧いた。続いて、恒例の神谷会員のビデオ作品は「加賀白山の山行」と「傾山の春」が上映された。宮崎豊喜会員の乾杯で開宴。会員の夏山報告などスピーチを交えながら、楽しい交歓の一刻を過ごした。

出席者 宮崎豊喜・本田誠也・田上敏行・和仁古昇・松本莞爾・菊池更生・門脇愛子・河上洋子・馬場博行・広永峻一・矢毛石豊・丸尾龍一・太田章雄・加藤功一・藤本多加志・前田辰男
計16名

◇日本山岳会創立90周年記念晩餐会

＝支部長会議・自然保護全国集会＝

日時 平成7年10月14日～15日 2日間

場所 東京都 新高輪プリンスホテル

内容 皇太子殿下を始め、全国から756名が参集して盛大に開催された。この席で前・熊本支部長奥野正亥氏はほか10名の新名誉会員が紹介された。晩餐会はフランス料理のフルコースで各テーブルごと賑やかに交歓した。

5/15 自然保護全国集会は、JACルームで

開催。本田支部長が出席した。

出席者 本田支部長・西沢支部顧問 計2名

◇秋季例会(五家荘・白鳥山)

日時 平成7年10月28日～29日 2日間

場所 熊本県八代郡泉村樺木民宿「樺木山荘」
白鳥山Ⅱ 1639m 登山

内容 五家荘地区は紅葉見物の車の列で交通渋滞。樺木山荘到着は大幅に遅れた。高校教師の川端会員は、海外からの留学生2人を連れて参加したが、何れも日本語をよく話す16才の快活なお嬢さんで、皆の人気を集めた。翌朝は生憎の雨、予定していた上椎葉からの五勇山を変更して、唐谷から白鳥山に登ることにした。マイカー6台を連ねて峰越林道を越え唐谷登山口に向かう。時折パラつく小雨の中をゆっくり登り、石灰岩の露頭が立ち並ぶ御池平へ。石井会員がブナの倒木からむサルナシを見付け、キウイーに似た甘酸っぱい果実を分け合って賞味する。御池の湿地を半周してアスナロ林に出る。西へ廻り込み尾根伝いに山頂を目指す。尾根の通過点のような灌木林の山頂からは、展望は期待できない。二等三角点の標石を囲んで今西コール、高々と奇声を揚げる。少し早いがここでランチタイムとする。下りは早い、35分で車止めに帰り着いた。

参加者 本田支部長・石井久夫・田上敏行・菊池更生・川端浩文・河上洋子・池崎浩一・後藤之後・丸尾龍一・太田章雄・藤本多加志・前田辰男
計12名
オーストラリア留学生(鹿本高校)
メラニー・ロビンソン
タイ留学生(玉名女子高校)
スピシャー・ローシナパン・ヤワオン

◇第11回宮崎ウエストン祭

日時 平成7年11月3日(金)

場所 宮崎県高千穂町五ヶ所高原 三秀台

参加者 西沢健一・佐藤光俊・田上敏行・石井久夫
計4名

◇新年晩餐会(奥野名誉会員祝賀会)

日時 平成8年1月7日(日) 16:00～19:00

場所 熊本市千葉城町 熊本厚生年金会館

内容 恒例の晩餐会新年はいつもより時間を早めて、新しく名誉会員となられた奥野正亥氏の祝賀会として開催された。会員番号1818番の奥野さんは既に永年会員になっていられるが、今回は戦前の朝鮮での数々のパイオニアワーク、及び熊本支部長として在任中のご功績に対して推薦されたものであろう。支部にとってもたいへん名誉なことであり、心からお祝い申し上げたい。祝賀会は先ず本田支部長の祝辞、奥野名誉会員の謝辞、支部を代表して河上洋子委員から記念品の贈呈がなされた。このあとビデオ「日本山岳会この10年の歩み」が上映され、祝宴に入った。

出席者 奥野正亥氏ご夫妻・西沢健一支部顧問
本田支部長・和仁古副支部長・田上常任委員・中村恵二委員・河上洋子委員・馬場猛夫妻・宮崎豊喜・石井久夫・大木野徳敏夫妻・門脇愛子・馬場博行・広永峻一・矢毛石豊・池崎浩一・後藤之俊・丸尾龍一・加藤功一・井手雅捷・前田辰男 計24名

会 員 消 息(短信)

◇西沢健一

10月より家業の店(文具)を閉店。全く自由の身となりました。

◇馬場 猛

93年は山行なし。94年は1月に樋口格さん夫妻と三池山(388m)にでかけたが、あと山頂まで15分か20分という所で引き返すという体たらく。その1月下旬から2月にかけては、ほんの500m先の病院にも自力では行けず、往診を頼んだり、車で送ってもらったり、我ながら惨めな日が続きました。いまだに通院が日課で、95年も山行なし。家に閉じ籠もる日が続くのと、難聴が悪化しつつあるので、今のうちに聞かねばとS-PCM(衛生デジタルラジオ)を取り付けましたが、高・低音は聞こえず半分くらいしか楽しめません。でもアルコールの方は毎日欠かさず、もう一つのJACライフを楽しんでいます。

◇宮崎豊喜

このところ毎年4回も手術で入、退院を繰り返しています。現在もリハビリ中でいつまでかかるか分かりません。それでも希望を捨てずに励んでいます。皆さんにはいつも励ましていただき感謝しています。元気な姿でまたお会いしたいと願っています。

◇佐藤光俊

一昨年7月、阿蘇兜岩付近でパラグライダーフライト中、事故で両足骨折し阿蘇中央病院で入院治療しました。現在は一応治療しましたが昨年末、骨折部に挿入されていた金具を取り出すため再入院。引き続きリハビリ中です。山登りが再開できたら、念願の祖母山頂からフライトをしたいと頑張っているところです。昨年熊本支部に復帰させていただきました。支部会員の皆様従前通りよろしく願いいたします。

◇石井久夫

昨年12月初めに宮城県の伊豆沼にマガン、ヒシクイを見に行って来ました。栗駒山の雪がきれいでした。

◇川端浩文

タイ、オーストラリアからの留学生を連れて、高千穂峰に登りました。風が強く予想以上にハードな登山で早々に下山しました。

◇河上洋子

熊本学園大学の成人公開講座で「戦後の自分史づくり」を聴講しています。戦後50年というのに記憶が相当に曖昧です。50年史が書けるかどうか、いま苦闘中です。

◇鶴田佐知子

昨年は6人目の孫が生まれたり、娘の新居への引っ越しの手伝いやらで、旅行も多忙な年でした。久しぶりに北アルプスにも行き、蝶ヶ岳、常念岳から穂高連山を眺めることができました。

◇神谷平吉

昨年7月、十二指腸乳頭部のポリープの手術をしましたが、お陰様で順調に回復し10月初めから登山も出来るようになりました。

阿蘇南外輪の山々や、由布岳などを訪ねました。

□ 中本 環

自動車の運転免許が、正月明けには取れる予定です。取れたら山に出かけるのに便利になると楽しみにしています。

◇ 新入会員

井手 雅捷 12113 1995.10入会
い で まさかつ

☎862 熊本市楠 2丁目1-45

☎096(338)0163 紹介者 矢毛石 豊

◇ 支部役員

支 部 長 本 田 誠 也

副支部長 和仁古 昇

常任委員 田上 敏行

委 員 工藤 文昭 中村 恵二

河上 洋子 広吉 功

会計監事 神谷 平吉

支部顧問 奥野 正亥 西沢 健一

名誉会員(永年会員) 奥野 正亥

終身会員 馬場 猛

自然保護委員 和仁古 昇 河上 洋子

リハビリをする破目になった。しかし支部としては、日本山岳会創立90周年記念事業のマカルー登山隊に馬場会員を派遣、また前支部長の奥野さんが新しく名誉会員になれるなど、嬉しいニュースが相次いだ。そして支部報第7号も発刊の運びになった。原稿を整理しながら60代以上が過半数を占める支部会員が、よく山に登っているのに感心する。

今年私は古希になった。無理の利かない年頃にさしかかったことを自覚。ところで来年は熊本支部設立40年目になる。従って支部報第8号は40周年記念誌との合併号にしたいと考えている。また会員の皆さんのご意見を聞いて、記念集会や記念のための海外登山ツアーなども計画したい。

《追記》 巻末に支部図書・資料目録を掲出しました。これは今までにJACの本部をはじめ、関係各位からいただいたもので支部の貴重な財産です。支部事務局で保管していますが、必要な方にはいつでも貸出しをしますので、お申し込み下さい。また、石井久夫氏の原稿が遅れて届きました。既に初校が済んでいたもので巻末に入れさせていただきました。

(本田・記)

*カットは熊本多加志会員です。

編 集 後 記

昨年は私にとって厄年だった。春頃から年来の腰痛が再発して通院していたが、5月末に屋久島登山から帰ると、激しい痛みで身体を動かすことも出来なくなった。直ちに入院したが、1ヶ月余の入院生活は私にとって初体験だった。7月半ばに退院し、早速以前からの計画だった木曾御岳に、中高年グループ30人を連れて登った。治癒状態を検証する意味もあったが、予想以上に体力の衰えを痛感させられた。1ヶ月後の8月にはイランのダマーヴァンド(5671m)に登ったが、5000mラインにも到達できずリタイアした。また10月半ばには、古い仲間たちを誘って八ヶ岳を縦走した。このときも行者小屋から赤岳の急登は可なり応えた。その結果は年末まで通院



熊本支部・図書資料目録

発行(著者)	図書・資料名	ページ/大きさ	出版元/発行年	寄贈/購入
日本山岳会	ビデオ・カセット 人を讃え山を究める (日本山岳会2010年の歩み)	20分	1995	日本山岳会
日本山岳会	ビデオ・カセット マカルー東稜・未知への挑戦 (日本山岳会マカルー登山隊 1995)	39分	1995	日本山岳会
神谷 平吉	ビデオ・カセット 秋の石堂山		1990	神谷平吉氏・贈
神谷 平吉	ビデオ・カセット 春の万年山		1992	神谷平吉氏・贈
神谷 平吉	ビデオ・カセット 早春の仰烏帽子山		1989	神谷平吉氏・贈
神谷 平吉	ビデオ・カセット 秋の白髪岳		1989	神谷平吉氏・贈
日本山岳会	中国・日本・ネパール 1988年 チヨモランマ/サガルマタ・友好登山隊報告書	350P 26x21	1990	日本山岳会・贈
東海支部	名古屋からの山なみ	275P 21x15	中日新聞社 1991	東海支部・贈
東海支部	雪蓮峰報告書	85P 26x18	東海支部 1991	東海支部・贈
東海支部	東海支部報 NO. 1~45	774P 26x19	東海支部 1991	東海支部・贈
東海支部	東海山岳 NO. 6	405P 21x15	東海支部 1994	東海支部・贈
関西支部	関西支部報 NO. 1~50(合本)	590P 26x18	関西支部 1988	関西支部・贈
関西支部	関西支部50年史	304P 21x15	関西支部 1989	関西支部・贈
京都支部	山城三十山	194P 20x14	ナカニシヤ出版 1994	京都支部・贈
山陰支部	山陰の百山	201P 21x20	山陰支部 1989	山陰支部・贈
山陰支部	創立40周年記念誌	147P 27x19	山陰支部 1989	山陰支部・贈
東九州支部	大分百山	207P 18x13	東九州支部 1991	東九州支部・贈
福岡支部	九州登山史年表	69P 26x18	福岡支部 1992	福岡支部・贈
下関山岳会	稜線六十年史	253P 26x18	下関山岳会 1991	下関山岳会・贈
(財)自然公園 美化管理財団	美しい自然公園 霧島	48P 33x24		石井久夫氏・贈
国土地理院	日本の山岳標高一覧(1003山)	144P 26x18	国土地理院 1991	国土地理院・贈

発行(著者)	図書・資料名	ページ/大きさ	出版元/発行年	寄贈/購入
JAC 婦人懇談会	Mt・SHIVA 1988 登山報告書	80P 26x18	1988	JAC婦人懇談会
JAC 自然保護委員会	山の自然学現地講座	201P 29x21	1995	JAC自然保護委員会
飯山達雄・編	北朝鮮の山	174P 223x297	図書刊行会 1995	奥野正次氏・贈
JAC 婦人懇談会	村井米子追悼集	105P 21x15	1989	JAC婦人懇談会・贈
JAC 婦人懇談会	川森佐智子追悼集	104P 21x15	1989	JAC婦人懇談会・贈

韓国岳十五夜登山

石井久夫

1986年4月、ながい教職生活の最後の任地となった高原畜産高校に赴任した。以前から、高千穂峰を眺められる山麓に住みたいと願っていたが、その願いが叶えられた。しかも霧島登山をするには絶好の場所である。今までに私は時折り、月明りを頼りに山を歩いたことがあった。月明の山道はライトなしでも結構歩くことができた。それで高原町に来て最初の秋に、十五夜の韓国岳に登った。その時の快適な経験から毎年、韓国岳の十五夜登山をしようと思い立った。たまたま学校で同僚にその話をしたら、是非同行したいということになり、それから毎年定例的に実施することになった。それは退職後の現在も続いており、今年で11回目になる。在職中は十五夜がウィークデーの時には、いきなり登って帰るというパターンであったが、土曜日と重なるときはグループで車を利用して、えびの高原キャンプ場に上がり夕食の支度をしながら、その夜のプランを考えたりした。山の状態は毎回違って、山頂にかかる雲を気にしながら、慎重に行動することが多かった。いつも17時頃には夕食を済ませて、山頂に19時頃到着し月の出を待つというパターンで行動した。あとは、その年により夫々に違っている。或る時は雲に遮られて遂に月を見ることが出来なかったり、また途中で雨に会い今日は駄目かと落胆していると、雲の幕がサーッと引かれて満月が姿を現したりという具合である。標高1700mの山頂で、寒さに震えながら月の出を待ち侘びたこともあった。強風に千切れ飛ぶ雲間から、慌ただしく光を投げかける月を見たこ

ともあった。山頂の岩陰で呑んだ熱いコーヒーの味が忘れられない。満月を十分に楽しんで下山する頃は、月は中天にかかりライトがなくても、足元を苦にせず下ることができた。下り着くと、高原を貫流する谷川の出湯が待っていてくれる、これがまた楽しいものだ。月明の川湯温泉はまことに風流で、夫々が勝手に岩を除けたり、川底の砂を掘り広げたりして、自分の湯舟を作って入るのである。夏場は大勢の人で賑わう川湯も、秋が深まり肌寒い頃になると閑散としてくる。こうなると十五夜登山組の天下で、ススキの穂ごしに見る満月は、神々しくて神秘的でさえある。時折は哀愁を帯びた雄鹿の鳴き声を聞きながら高原の秋を満喫するのである。残念なことにここ数年、川湯の湯量が減ってきた。特に今年などは殆ど涸れて出湯を楽しむことが出来なかった。しかし、そこはえびの高原、温泉に不自由することはない。十五夜が土曜日の時は、高原のテントの中から夜を徹して名月を楽しむことになる。年とともに参加者も増え、今では年中行事として定着してしまった。韓国岳山頂で月の出を待つ間、始めの頃はテルモスのコーヒーだけだったのが、いまではコッヘルで湯を沸かして入れる本格派となり、また簡単なキッチンを開設するなど、さながら山上の喫茶店である。山頂から俯瞰する夜景も素晴らしいが、最近は地上の灯火も多くなり、特に産業の拡大からか明るい光のブロックが増えてきた。私には、その輝きが自然美を浸食する象徴のように思えてならない。